

### 1 自己評価及び外部評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1890200148		
法人名	福井県医療生活協同組合		
事業所名	和の家 えがお		
所在地	敦賀市公文名1-6		
自己評価作成日	令和 4年11月6日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/18/index.php">http://www.kaigokensaku.jp/18/index.php</a>
----------	---

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 福井県社会福祉協議会
所在地	福井県福井市光陽2丁目3番22号
訪問調査日	令和 4年12月07日

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

併設された在宅総合センター和の協力を得ながら運営しています。併設の事業所行事や避難訓練等に参加させてもらったり、馴染みの利用者さんや職員に会いにいたり関係性ができています。入居前に利用されていた方もおり、顔なじみでいつも心よく受け入れてくださっています。コロナ禍であっても職員一人一人が入居者の笑顔につながる企画を立てて進めている。えがおで看取りをはじめた4年が経過、その都度振り返りを行いながら職員の中では次につながる意欲につながっている。

#### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、敦賀市の名勝「気比の松原」から南方4kmの「公文名」という地域に立地し、東側10m先に流れる黒河川に沿って建っている。田畑の中に住宅が点在する静かな地区である。敷地内には同一法人が運営する事業所「在宅総合センター和」があり、当事業所と有機的な連携を保ちながら、利用者の安心と尊厳のある生活を地域住民と共に支え合う「和の家」を目指している。法人の「あなたの笑顔がみたいから」という理念を常に意識して支援するという信念を持って、職員は毎日の実践に立ち向かっている。新型コロナウイルス感染症からの感染防止のため、自粛した活動しかできないが、利用者の笑顔を見るために、役職員が一丸となって社会福祉の根源に学ぶ事を目指している事業所である。

### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	入職時には研修ファイルでえがおの理念や身体拘束についてオリエンテーションを行っている。えがおの理念を玄関に掲げ、入居者だけでなく職員も笑顔になれるように日々コミュニケーションを通して実践につなげている。	理念を基に年間目標と個人目標を立てている。管理者は、理念や目標を常に意識出来るよう、業務日誌の「利用者申し送りシート」に記載している。その他、玄関や共用空間にも理念を掲げ、日常生活における実践に活かしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルスの影響で地域行事や活動がほぼ中止。3密を守りながら地区の方との交流を続け、地域に根付いた施設になるよう努めている。	自治会には加入していないが、感染対策を十分に図った上で、敷地内の「つるが生協在宅総合センター和」と合同で地域住民との健康まつり、小・中学生オープンスクール、保育園児とのハロウィン交流、地域文化祭、年末地域清掃やどんど焼きに参加することでできた。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	年3回を目安に発行している新聞にて施設での取り組みについて発信をしている。コロナ禍において地域訪問は難しく工夫をこらした繋がりが必要である。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回の会議について、4・8月は書面での開催となった。内容として活動内容やアグメント等について報告をしている。参加者に意見をいただき、サービスの向上や職場作りに繋げている。議事録については職員へも回覧している。	運営推進会議は、デイサービスセンターと合同で、偶数月の午後1時間程度開催している。6月は実施出来たが4月、8月は書面開催であった。構成員は家族、民生委員、自治会長、市職員、3地区の地域包括支援センター職員、生協診療所看護婦長、他事業所、消防等である。全家族へ絵手紙と共に議事録を送っている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	日々普段のわからない事などは相談、アドバイスをいただく事がある。コロナ禍で市から委託を受けた介護相談員の方が定期的に訪問される事が出来なくなっている。	運営推進会議に市職員や地域包括支援センター職員が出席しており、各種状況を共有している。必要に応じて報告、連絡、相談を行い、受けたアドバイスを記録している。コロナ禍のため、市委託の介護相談員とは電話で連絡を取っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束適正化委員会を設けている。多職種と意見交換を行い、法人内・法人外それぞれに委員会の内容を職場職員とも共有し拘束がなくなるよう取り組みを行っている。事業所内で学習会を行い身体拘束に対する理解を深めている。	職種と職務内容、必要事項は重要事項説明書に明記している。身体拘束適正化委員会を設置し、マニュアルを整備し、年間学習会を2回実施している。委員会での協議事項は、職員に回覧し他業種とも共有している。ベッドの4点柵は日常解除に向け見直しを検討しているが、玄関は幹線道路や側溝を考慮し施錠している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待に関しては内部研修資料に基づいて伝達学習を行っている。普段から日々の関わりの中で気になる言動については直接声掛けを行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、成年後見人を利用している入居者が1名おり、用事がある際は連絡を取り合っている。介護支援専門員職員が10月に外部研修参加。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、契約書に沿って内容を説明している。その都度、家族の聞きたい事を尋ねながらすすめている。具体的な例を出して説明するなどして理解いただけるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	今年度も他の事業所と比較ができる「はがき式のアンケート」を実施している。家族との面会時や電話がけの際はこちらでの様子を伝えながら、家族の要望を聞くように努めている。	コロナ禍のため、家族の面会は状況に応じて対応している。家族に対して、利用者の状況が分かるように写真や絵手紙、職員の情報等も送付している。また、日本医療生協連合会では、他の加盟事業所と比較し、改善に活かす主旨の「はがきアンケート」を実施している。	意見箱は、家族の意見を聞きたいという事業所の意思の現れと、度量の広さも表している。また、話すことができない家族もいる前提で、意見箱の設置を期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回のペースで職場内に運営会議を設けている。事前に会議を設ける事で活動内容・入居者についての状況も含めより具体的に部会で話せるようにしている。身体拘束についてや当月立案のケアプラン内容についても意見をいただいている。	「部会」という職員会議を毎月開催しているが、その前に事前会議として管理者、ケアマネジャー、リーダー、看護師で「運営会議」を開き、部会のテーマやケアプランの立案に必要な情報等を提供している。このシステムにより、職員から様々な提案が挙がり、利用者の生活の充実に繋がっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者から職員の状況も含め、えがおの現状を代表者に伝えている。看取りや入退居の場面では、代表者も現場に足を運ばれている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の研修を受けている。研修では社会情勢を学ぶ機会にもなっている。コロナ禍で外部研修が難しくWEB学習に力を入れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	福井県グループホーム協議会に加入しており、コロナ禍でZOOM研修への参加や運営推進会議への参加をお声掛けをして関係づくりに努めている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居者に担当を設け、本人の表情や行動を観察しモニタリングを実施している。それを含めてアセスメントを行っている。本人とのコミュニケーションを深め安心出来る関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービス導入前の面会や電話の際に、これまでの様子や認知症の状態や進行等を家族とよく話し、不安や要望等を聞き、安心出来る返答、アドバイスを行う事で関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービス導入する段階での本人や家族との会話でまず「必要としている支援」を検討している。状態の変化に伴う相談は看護師が入り、看取りの際は職員間で「どうしたらよいか」を話し合い家族にも力を借り対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は入居者が出来る作業を理解し、その作業が維持出来るように努めている。入居者の生活スタイルを崩さないように心掛け、率直に話し合える信頼関係を築くように努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	受診時や面会時には、家族との時間を大切にしている。状態変化時には家族へ連絡し協力をいただく事で家族も一緒に本人も支えられる関係作りに努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で事前に連絡をいただき感染対策をしながら面会出来るようにしている。	面会の制限は、国の通知、感染防止対策、面会環境の工夫で緩和している。外へ出られないため、理髪は2か月毎に地域の業者に来てもらっている。利用者の担当は、職員がペアを組み3人担当している。事業所独自の年賀状を作成していることが特徴的である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者を観察し利用者同士が関わり合いを持てるような席にしている。また運動会などの行事を行う事で利用者同士が支え合い関わり合いを持てるように努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	看取りを行った家族との関係を大事にし、後日お会いできる際は、ご様子を伺うことがある。又、退居された入居者家族からの毎年お米を善意で頂く交流が続いている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員ひとりひとりが入居者との関わりの中で、言葉をひろい本人の思いを聞くことができるよう努めている。本人の希望意向の実現が困難な場合は代替案を提案するなどしている。	利用者の多くは、「家族に会いたい」、「面会に来て欲しい」、「家に帰りたい」と願っている。生活の中で在宅総合センター和との交流もあり、馴染みの関係になった職員が面会に来たりすることで、思いのこもった交流に繋がっている。毎日の暮らしの中で「見える化したプラン」に繋げる工夫をしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	新しい入居者の受け入れの際には利用されていたサービス事業所への聞き取りを行い、少しでも本人が過ごしやすく送れるよう努力している。その後はモニタリングやアセスメントを通して変化する生活に対応している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員1人ひとりが入居者の日々の変化を大切に、情報を共有し、支援方法の検討などを行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員が担当している入居者のモニタリングを毎月行い現状に合っているか確認をしている。入居者本人や家族の意見を取り入れ、職場会議を通して介護計画を見直し作成している。	年2回ケアプランを作成しているが、毎月の部会で意見交換ができる。担当者が毎日の経過記録に支援内容を記録し、この部会を通して現状に沿った支援かどうかを見直している。必要に応じ利用者、家族、他の職員との協議により、職員間で共有した理想的なケアプランを作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者経過記録の記録方法の変更を行い、より介護計画に沿って行われているか確認しやすいように改善している。情報共有した内容を職場会議で話し合い、ケアの実践や見直しの検討に活かしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者本人や家族の状況の変化、社会情勢に伴い受診支援などを丁寧に行っている。入居者の状況が医師や家族に伝わりやすいように受診時は情報提供書を作成している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍の為、なかなか地域との関わりはできないが、新聞を発行し、情報発信することで、寄付のタオルなど頂ける機会がある。コロナが治まった際には、地域行事に参加し、つながっていききたい		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	現在8名がかかりつけ医の往診で対応している。熱発や状態変化があった際は、他職種連携や電話で報告から、早めに対応して頂けている。家族へのフォローもかかりつけの病院からして頂けている。	11月に1名の看取りを行い、約7名の利用者がつるが生協診療所を利用している。基本的には、月2回往診対応をしている。受診時は、電話連絡後に利用者の写真や動画をつけた情報提供書を持参する。受診後の結果は、管理者かリーダーが家族へ電話や手紙等で伝えている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	緊急時以外は週2回定期的に看護師が入っている。その都度、入居者の変化や相談事を報告しアドバイスを頂いている。月1回医療連携として入居者の状態などの情報共有する時間を設けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際は、早期に退院できるようにこまめに地域連携室と連絡を取り合っている。医療的な部分では、看護師やかかりつけ医にも相談し、退院後のケアについて情報共有している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	担当者会議の際に、「事前意志確認書」を用いて終末期の話しをしている。日々の変化については、面会時などに伝えている。看取り期に入った際は、介護職、看護師、かかりつけ医、家族と話をする場で設けている。終末期についての学習会も行っている。	入居時に、本人と家族に重度化と終末期、看取りが行えることを伝え、同意書を書いてもらっている。看取りが必要になると、医師、看護師、介護士と協議する。過去の看取りの「振り返りシート」を作成し、職員と共有している。終末期を迎える利用者、家族への適切な対応に向け、職員の看取り研修を年2回実施している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	入居者の急変時の対応として、毎年救急法の学習を行っている。コロナ禍の為、実践は行っていないが、WEB学習にて振り返りを行っている。緊急時の連絡体制についても、マニュアルを作成し職員に周知している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に併設の在宅総合センターとの火災避難訓練を実施している。事業所独自では夜間想定での避難訓練も行っている。地域との協働体制も運営推進会議などで情報共有している。	管理者は、市のハザードマップを検討し、「地区防災マップづくり」や「防災士養成研修」に参加している。年2回、法人全体の昼夜想定、総合火災・水害・原子力対応の訓練を行っている。緊急時の備蓄品は、併設の在宅総合センターに備蓄している。地域住民の参加・協力は無い。	事業所は、河川合流地区にあり、緊急時には地域住民等の支援が不可欠である。運営推進会議で検討し、消防署等関係者との連携と防災計画の作成が望ましい。同時に備蓄品リストを作成し、事業所内に水、食料、備品の備蓄を期待したい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人の声掛けや対応(その人に合ったケア)に努め、利用者の尊厳に配慮した言葉遣いをするように心掛けている。	玄関掲示板に、法人の「個人情報保護方針＝プライバシーポリシー」を掲げ、運営規程や重要事項説明書にも明示している。介護福祉士の講師による講演や、本部や事業所で学習会を実施している。事務室には台帳や情報書類を保管し、出入口を施錠している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の会話からその方の思いや希望を聞き出すように心がけている。表情、行動を確認し、声掛けを行い、自己決定を促し対応している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	「その人らしく」を大切にし見守りを行っている。一人一人のペースを乱さないよう支援に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	コロナ禍であまり外出が出来ないが、施設内でも入居者の主張を尊重し、身だしなみにも気を配り、ケアやコミュニケーションに努めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者とコミュニケーションをとる中で好きな物や食べたい物を聞き出し、食事やおやつ作りの際に取り入れていこうと努めている。食事・おやつ作りの際は、職員と交えながら楽しく一緒に作り、笑顔がたくさん見受けられる。	ご飯は3食とも職員が炊き、他は委託業者が調理している。職員は食事介助、投薬、見守りを交代で行い、事業所の食事もしくは弁当を食べている。四季の行事食は月に2～3回あり、手作りおやつは週1～2回職員と一緒に作り、職員も笑顔で楽しみながら支援している。食器類は各自で購入している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分摂取量が少ない入居者が少しでも多く摂取していただけるよう、好みの食材や温度、容器等を提供している。時間帯による量の差を(サイクル)を見つけ、「一日」で考えて摂取できるよう進めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床時、食後に口腔ケアを行っている。自分で難しい場合は介助。介助への抵抗や理解が出来ない入居者については受け入れやすいタイミングを見極めて対応している。状況に応じて歯科往診も進めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表を使用する事で排泄パターンの把握が行っている。入居者それぞれに合った排泄支援が行えるように職員間で常に情報共有を行っている。	業務日誌に、利用者のバイタル、水分、排泄に関する情報を記入している。排泄をチェックすることで、日中と夜間のオムツ利用は3名になった。夜間のポータブルトイレ利用は1名、離床マット使用は2名で、全職員が情報を共有しながら、利用者に適した排泄支援に取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分1日1200CCを目安に水分補給を促し、水分量の把握と日々の体操や腹部マッサージに取り組んでいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2～3回体調不良がないか状況を把握した上で、出来る事は自身におまかせして無理のないよう入浴を楽しめるように努めている	原則週2～3回、午前中に3名が入浴している。入浴剤は1名のみが使用し、湯は継ぎ足しである。浴槽は個浴用で、必要があれば座椅子が設置できる。当日の入浴担当職員は、誘導、入浴、髪の乾燥、着替えまでを行い、入浴後の誘導と水分補給は、他の職員が行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の状態、希望に添い日中の臥床時間を設けている。居室環境に配慮しながらゆっくり休んでもらえるよう又他者とのトラブルがないように心がけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	飲み残しがないか見守りしながら支援し状態変化が観られたらすぐに看護師、主治医などに情報共有し指示をもらい経過観察に努めている		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	無理強いせず、出来る範囲で楽しく継続できるように声掛けをしている。おやつも好みを伺って手作りしたり飽きのこないよう工夫して提供している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で外出の機会は減ったが、季節ごとにほぼ全員で外出している。その日の希望にそって家族と外出される方の支援も行っている。	コロナ禍で外出が減る状況の中、全員で美浜の「園芸LABOの丘」に行くことができた。また、近くの保育園に向き「ハロウィン」を楽しんだことも思い出になった。車でのドライブでレインボーライン、菜園等に行ったり、天気の良い日に散歩すると、利用者の表情がよくなる。外出が減っているため、室内イベントや体操を増やしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人の財布は事業所で管理している。移動スーパーや買い物など、お金の管理が可能な方には支払い等のやり取りが行えたらと思っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	前年度に引き続き、毎月入居者の様子を写真を交えてコメントを添え家族の方々へのお手紙を続けている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	廊下などに行事の催し物、フロア内には季節の飾り付けを行っている。	食堂兼共用空間の先にある調理場はカウンターになっているため、食堂を見渡すことができる。配膳の音や食事の匂いが共用空間に漂ってくる。窓にある折り紙のクリスマスツリーには、笑顔の利用者写真を貼っている。ゆったりとした広さのテーブルやソファを配置し、居心地よく過ごせるよう工夫している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者の状態変化や入れ替わりがある際、座席配置を変更しトラブルのないように配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には、使い慣れているタンスを活かして、本人が少しでも居心地よく過ごして頂いている。	居室は、ベッドを2台置ける広さがあり、広く大きい窓から陽差しが入ってくる。壁には大きな掲示板を設置し、家族や行事の写真、絵等を飾っている。室内に洗面所やトイレが無く、清潔で明るい。落ち着いた雰囲気であり、居心地よく過ごすことができる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	職員同士情報共有し、日常生活が安心、安全に送れるよう工夫している。		